

しごとがら、ハサミやナイフを使うせいもあり、旅先で刃物屋を見つけるとつい入ってしまう。店主は頑固そうで目付きが鋭い。販売品が凶器に使われないよう慎重なのだろう。「なにをお探ですか」と尋ねてくる。「鉛筆を気持ちよく削りたいと思って……」とこちらがモゴモゴ言う。だいたいこの時点で店主は腰砕けになりながら、「鉛筆を削るにはもつたないが」と前置きして、いくつかの切りだしナイフを薦めてくる。

「鉛筆なんて」と思われがちだが、じつさい鉛筆は手強い。刃物をしばし使うと切れ味が鈍る。芯の主成分である黒鉛は、存外と硬い気がする。芯を好みの尖りかたに仕上げるにも、刃先の形状が微妙にかかわり、切れ味がよければ鉛筆が削りやすいわけではない。

先ごろ、鉛筆を削るすばらしい場面に出あった。中国のドキュメンタリー映画『三姉妹 雲南の子』（監督＝王兵、二〇一二年）である。母が家出し、父は出稼ぎに行かなければならない。長女が母代わりに幼い妹のめんどうを見ながら、子どもたちだけで山間の小村に暮らしている。十歳の長女は、家畜の世話や畑仕事に毎日を費やし、ときおり麓の学校に行く。その彼女が、農作業用の鎌で鉛筆を懸命に削るのだ。「勉強したくてたまらない」との気持ち痛切に伝わる。

連載エッセイ第38回

「貧しい」と言われる地域で撮られたドキュメンタリーを観る際、子どもがどんな筆記用具を使っているのかに、知らず目がいく。圧倒的にボールペンが多い。ボールペンは配れば使えるのに対して、鉛筆には削る刃物が要り、消しゴムも必須だ。削りカスや刃物の扱いかたにも神経を払わなければならない。鉛筆だけではなく、それを取り巻くさまざまな品物が揃わないと、使用は不可能だ。

鮮魚があっても、そこに鋭い包丁や醤油、ワサビや皿がなければ、〈刺し身〉にはならない。こういう事態を〈文化的な複合〉と言

「をった」

うのではなかったか。鉛筆のあとにボールペンが発明された。そんな歴史の順序が逆転する現象が世界で起きている。固定電話抜きに携帯電話やスマートフォンが普及した国は多いだろう。

印刷用の文字は、大まかに〈活字→写真植字→デジタルフォント〉の順に普及してきた。漢字文化圏に属する中国や韓国、日本を見てみよう。日本には、活字も写真植字も、印字システムとしてなんとか残っている。現地の友人デザイナーに聞くとところでは、中国や韓国には活字と写真植字は跡形もないそうだ。

台湾はどうなのだろう。

『三姉妹 雲南の子』の長女は「使いやすい鉛筆削りがあれば」と願うだろう。あるいはシャープペンシルか。いつぼう、鉛筆を飛ばしていきなりボールペンに馴染んだ子どもは、鉛筆削りや消しゴムが無い不自由さを知らない。いったい、どちらがよいのか。家のなかにモノが溢れる今日、片づけコンサルタントは「〈本当に必要な〉を買って基準にしろ」と助言する。だが〈必要という基準〉は、文化に左右され、時代とともに揺れている。不便を嘆くよりは、不便と感じられるしあわせを

鈴木一誌

味わうべきかもしれない。さいきん、神戸の美術大学でデザインの授業を受けもっている。学生は、およそ二十歳で九割は女子だ。コンピュータを使

わずに、紙上の文字を切り貼りさせる。やり馴れない手作業のため、小さな文字がしばしば机から飛び散る。先日、ハツとした。机の下を探し、ようやく数ミリ角の紙片を見つけた学生が「おった」とうれしそうに言う。「あった」ではない。歴史的仮名遣いで書けば「をる」なるそのことばには、擬人化を感じる。不在であった紙の切れ端が目の前に現われたときの「をった」。モノにひとの気配が潜む。忘れていた語感だった。

（すぎき・ひとし／ブック・デザイナー、題字デザイナーも筆者）